

『雑談集』説話と『沙石集』伝本

加 美 甲 多

はじめに

時代は承久の乱の直後、『御成敗式目』制定の少し前、一人の人物が産声をあげた。無住一円道暁である。無住は嘉禄二（一二二六）年に東国において生誕し、正和元（一二三二）年に尾張の長母寺もしくは伊勢の蓮華寺において没したとされ、時代的には鎌倉後期を生きた僧侶である。鎌倉新興仏教を含めた既存の宗派を柔軟に受け入れながら、特に真言密教や臨済禅を学んだ無住は説教僧として積極的に啓蒙活動を行っていたようである。同時に無住は仏教説話集の編纂という形でも自身の仏教思想を表出し、啓蒙活動を行った。仏教説話集編纂に対する無住の意識は高く、無住の著作か否かが決していない『妻鏡』を除いても、少なくとも『沙石集』『聖財集』『雑談集』という三種の仏教説話集を著している。

『雑談集』説話と『沙石集』伝本

弘安二（一二七九）年、無住が五四歳の時に執筆、編纂を開始した『沙石集』は弘安六（一二八三）年に一旦は世に出る。それ以後も『沙石集』は無住自身が改編を行っており、そこに後の享受の過程における改編という要素が加わったことで、多数の伝本が創出されることとなる。現段階において『沙石集』は零本を含めると写本で約二三種、刊本（整版本）で約一二種の伝本が現存しており、現在進行形で新たな伝本が発見されている。さらに室町期から江戸期にかけて『沙石集』の抜書本・改編本、関連作品も数多く創出されている。

正安元（一二九九）年、無住が七四歳の時に執筆、編纂を行ったのが『聖財集』である。『聖財集』も無住自身が後に改編を行っているが、こちらは東北大学付属図書館蔵狩野文庫本、天明本の二種の刊本（整版本）のみの現存であり、後世の抜書本・改編本、関連

作品の類は一切残っていない。「初心ノ同法ノ為ニ愚意ノ法門任手ニ記シ畢ヌ」とあるように、無住は『聖財集』の読み手として僧侶を想定しており、特に前半は硬質な教説が展開されている。時には東国における自らの見聞譚、時には笑話的な譬喩譚を用いながら柔軟に教理を説いた『沙石集』とは執筆態度が大きく異なっており、『聖財集』において笑話的な譬喩譚は僅かである。

嘉元二（一三〇五）年から嘉元三年頃、無住が八〇歳前後に執筆、編纂を行ったのが『雑談集』である。無住の最晩年の著作と言える『雑談集』は刊本（整版本）の寛永二一（一六四四）年本、延宝七（一六七九）年本、刊年不明本、明治一五（一八八二）年本が残るのみであり、あくまで現存という限定の中ではあるが、無住の著作において本文の異同が最も少ない。『聖財集』と同様に後世の抜書本・改編本、関連作品は認められない。『雑談集』において笑話的な譬喩譚が複数存在し、硬質な教説と入り混じっている点では『沙石集』の執筆態度に近いが、巻第三ノ五「愚老述懷事」を始めとして自らの生い立ちや過去を多く語っている点では他の二書とはまた異なった性格を有している。

これらの書物の根底に共通して存在しているのは、仏教説話集編纂とそれに伴う啓蒙活動への無住の意欲と情熱である。五四歳から始まり、入滅する八七歳までの間、いわば人生の晩年において無住

が自らの著作活動に全力を注いでいたことは間違いない。『沙石集』の裏書の増補や『聖財集』の添削を入滅間近の八六歳頃まで行っていたことからその拘りの大きさは容易に看取できる。『沙石集』において、あらゆることに對する「執着」への戒めを何度も繰り返していた無住であったが、皮肉にも自らの著作に關する拘りだけではどうしても抑え難かったのであろう。そういった中で、八〇歳という齢になった無住が『沙石集』や『聖財集』に飽き足らず、なおも自らの思想の表出に心血を注いだ結果として創出された『雑談集』は無住の著作の集大成と位置づけることもできる。

本論においては無住の最後の著作である『雑談集』に見られる説話がどのような意義を有していたのかについて考察を加えながら、最初の著作である『沙石集』に見られる説話との関係性を中心に検討したい。特に『雑談集』説話は無住が最後に辿り着いた思想を表している可能性が高く、それを探ることは『沙石集』伝本の位置づけにも還元できると言える。

一 『雑談集』巻第二ノ四「妄語得失ノ事」

『雑談集』巻第二ノ四「妄語得失ノ事」の末尾には次のような説話が載る。^①

① 正直ナルハ、多クハ其徳アリ。奈良ニ貧シキ寺僧有ケリ。請

用ヲ得テ大ナル餐膳アルヲ、妻子ノ事ヲ思テ、イトクワデ、ヲロシ、テ、「夕方小法師ヲマイラセテ、給ハルベシ」トテ、房ノ者ニアツケテ帰ヌ。一人ノ小法師ハ他行シテ遅ク帰リケル。妻子ウエ／＼トシテ有ヲ見テ、トクワセタク思テ、クレ／＼二頂ヲツ、ミテ、形ヲカヘテ、小法師ガヨシニテ、「彼ノ御房ノ御ヲロシ、頂候ベシ」ト云ニ、トラセテ後、「小法師トモヲボヘズ。余人バシガ妄語シテ、取カ」トテ、尋テヲヒケルニ、ハヅカシサニ、ニグル程ニ、古キ井ニ落入テ膳モ皆ウチコボシ、衣裳湿シ死ナヌバカリニテ、中々世間披露有ケリ。

⑤コレ只正直ニ云テ、小法師ガナクテ、我レト来タルヨシ云タラバ、此レ程ノ損モ悪名モアラジ。不実中々アシカルベジ。此事存知スベシ。

⑥或上人鶏ノ卵ヲ取テ、ユデ、クヒケルガ、小法師ニカクシテ、茄子漬ト名ツケテ、食シケル。小法師コレヲ知テ、事ノ次ニ云ヒタク思テ、鶏ノ咩鳴ヲ、「御房々々、茄子漬ノ父ノ鳴候。聞セ給フカ」ト云ヒケル。

⑦或上人、鮎ノ白干ヲ、紙ニ裹テ、剃刀ト名テ、カクシヲキテ、食シケル。小法師、事ノ次ニ云ヒタク思ヒケルニ、主トトモニ河ヲ渡ルニ、鮎ノ河ニ見ヘケルヲ、「御房々々、ナマ剃刀

見ヘ候。御足バシ、御アヤマチアルナ」ト云ケル。

⑧では貧しい寺僧が小法師のためと偽って実は妻子のための「ヲロシ」（食事の残り）であつたが、小法師の帰宅が遅くなつてしまふ。飢えた妻子を見かねて小法師に変装して「ヲロシ」を取りに行つた寺僧は変装が露見しそうになり、遁走中に井戸に落ちてしまひ、「ヲロシ」をこぼして大怪我をしたという説話である。⑧では⑧の説話を受け、正直の道を書く。⑨、⑩は⑧の説話と⑨の教説を受け、「ヲロシ」を巡る上人と小法師の説話を載せる。⑨、⑩はいわゆる「和尚と小僧型」説話であり、「和尚と小僧型」説話に関しては、例えば美濃部重克氏のご考察等がある。美濃部氏も述べられているように、⑨は「卵は白茄子」、⑩は「鮎は剃刀」といった昔話との関連が認められる。また、近年に公開された徳川美術館蔵「法師物語絵巻」とも⑨、⑩は関連しており、工藤早弓氏が述べられているように、それぞれ「白茄子」（第二、三紙）、「鮎は剃刀」（第一四、一五、一六紙）に描かれている。説話⑨、⑩から『雑談集』は『沙石集』と同様に昔話や絵巻と深く関連しながら成立したことがわかる。では、無住がここで⑨や⑩の説話を用いた意図はどこにあるのだろうか。

⑪の傍線部に目を向けると、冒頭において「正直ナルハ、多クハ其徳アリ」とあり、⑪の説話は「正直」が主題であると無住は規定する。実際に⑪の説話においては妻子への情愛は説かれることはな

く、嘘をつくことや正直でないことの罪深さを無住は説くのである。寺僧が抱いた妻子への情愛は決して間違つてはいなかったが、それ以上に「妄語」の罪が重いからこそ、寺僧は「ヲロシ」を失った上に瀕死の重傷を負うのである。それは③の教説からも明白である。その上で④、⑤の説話へと続くのであるが、昔話等の世界に存在するこれらの説話を④、⑤の位置に引用した無住の意図は、やはり正直であることを主題とした譬喩譚としての役割であろう。小法師をだまして鶏卵や鮎を堂々と食べる上人と、それを見抜いて強烈な一言で最後に上人をやり込める小法師、この二人の虚々実々のやりとりは一見、仏教説話とはかけ離れた笑話のような印象を与えるが、無住の意図はそこにあるのではない。傍線を付したように④においては「カクシテ」、⑤においては「カクシヤキテ」とあり、上人たちは自らの行いを隠蔽していることを見逃してはならない。その上で鶏卵を茄子漬、鮎を刺刀と偽って食べるのである。これはまさに④の寺僧と同じく不正直な態度であり、殺生の罪と同時に妄語の罪を犯した上人は弟子である小法師にやり込められるという罰を与えるられる。

無住の著作の中においては道理や智恵等といった語が顕著に認められるが、正直についても多く説かれており、無住が啓蒙活動を行う中で特に重要視していた概念と言える。例えば、『沙石集』にお

いては次のような本文が認められる。^⑥

- ・正直ノ人ニテヲハスルニコソトテ、涙クミテ讀メラレケレハ、
（中略）サレハ人シテ物ノ道理ヲシリ正直ナルヘキ物ナリ、
（巻第三ノ二「問注ニ我レト負人ノ事」）
- ・上古ニハカ、ルタメシモアリ、当世ニハマメヤカニ難シ有正直ノ賢人ナリ、（中略）正直ノ者ヲハ天是ヲ助ケテ幸ヲ得シメ
（巻第九ノ一「正直之女人ノ事」）
- ・此妻ハ極タル正直ノ者ト見テ（巻第九ノ三「正直ニシテ宝ヲ得タル事」）

やはり『沙石集』において度々説かれていた正直の徳は『雑談集』においても引き継がれているのである。『沙石集』巻第三ノ二では相論（裁判）中に自ら「アラマケヤ」と言つた地頭の正直さに感動した北条泰時が地頭を称揚し、地頭を嘲笑していた人々も笑わなくなつたという説話である。無住は梶原氏の家系とされ、『御成敗式目』を制定した北条泰時を理想化する説話が複数認められるが、その北条泰時を用いて正直の道を説くのである。正直については『沙石集』巻第九ノ一、二、三においても連続して何度も説かれている。『沙石集』に認められる正直については以前にも私見を述べたことがあるが、『沙石集』においては正直、反正直を提示した上で、正直を選択する傾向がある。それに対して『雑談集』④から⑥

においては反正直のみを提示している。両者の相違はこの点に見出せそうであるが、実はそうではない。④から⑤の前段階において、智慧を伴った嘘は方便であると無住は規定し、説話や教説を配置している。その上で、智慧を伴わない嘘は妄語となり、④から⑤のような反正直につながると説くのである。嘘によって得られるもの、失うものを公平に説くという無住の姿勢に変わりはない。

『沙石集』や『雑談集』において正直の道がともに説かれていることは間違いないが、その上で重要なのは末尾の③、④の「和尚と小僧型」説話は笑話としてではなく、仏教における妄語の実例、正直の反例の譬喩説話として見るべきことである。後の享受において③、④は笑話としての側面に焦点が当てられていくようになる傾向があるが、『雑談集』においては④から⑤の構成の中で仏教説話として存在している。

(ここで、石川武美記念図書館(旧お茶の水図書館) 成簣堂文庫蔵 梵舜本(以下、梵舜本)の独自説話である巻第八ノ一〇「小法師利口事」の説話を挙げる。^⑧)

⑧常州ニ或山寺ニ、僧共、僧膳クヒケルニ、余ノ僧共ガ小法師ハ、ミナヲロシ食ヒケルニ、現乗坊ト云僧、ヲロシモセザリケレバ、其ノ小法師ガ申ケルハ、「ヲロシ、給ハヌ、現乗坊ヨリモ、小法師コソ恥カシク侍レ」ト云。

『雑談集』説話と『沙石集』伝本

⑨又尾州ノ或山寺ニモ、大食スル僧、僧膳ゴトニ、ヲロシモセヌコトニテアリケルニ、或時ヲロシノ見エケレバ、余ノ小法師ガ云ケルハ、「ヤレ己ガ御房ハ、今日コソヲロシシ給タレ」ト云ヘリ。「今見ヨ。アレハユヅケニテタヤサムズルゾ」ト云ケルニアワセテ、ユニツケテツリトシテムゲリ。【以下、同種の説話が続く】

「ヲロシ」を巡る僧と小法師のやり取りという点では『雑談集』説話と同様であり、従来は梵舜本の独自説話については無住の手によるものであるとされてきたが、これらの説話群を含め、梵舜本の独自説話については改めて検討する必要がある。⑨は「ヲロシ」を巡って最後に小法師が僧をやり込めるといふ説話である。説話の型としては『雑談集』説話の③、④と大差はないのであるが、説話の位置づけは大きく異なる。⑨では正直の道はおろか、譬喩説話としての要素が一切認められない。⑨の説話は無住の手によるものではなく「和尚と小僧型」説話が明確に笑話化されていく室町期から江戸期にかけて創出され、それが梵舜本の改編の時期と重なることで、梵舜本の独自説話として梵舜本に入り込んだ可能性が高い。

それは⑨を見れば、より明白である。「ヲロシ」を求めた小法師に対して、「大食スル僧」は反省することもなく、また無住に誠められることもなく、「ヲロシ」を「ユヅケ」(お茶漬け)にした上で、

これは別物であるとしてさりと食べてしまうのである。正直であることを真摯に追求することを勧める『雑談集』説話の①から⑩とは対極に位置しており、「ヲロシ」を一人占めにした和尚側の勝利に終わる。⑥の説話を強引に解釈すれば「大食スル僧」はどこまでも自分に正直であったとも言えるが、無住が他の箇所ですく正直の道とはかけ離れた解釈となり、やはりこれらの説話群は笑話として見るより他はない。

無住の説話には笑話が載るのでなく、あくまで笑話的な譬喩譚が載っているものであり、少なくとも笑いの中に批判の対象が存在する。⑦の説話からはそういった批判の対象が認められず、『雑談集』説話と比しても異質である。

詳しくは後述するが、同じ「和尚と小僧型」説話であり、後に狂言の「附子」へとつながっていく梵舜本の巻第八ノ一一「児ノ飴クヒタル事」と流布本系統には同一説話が載るが、流布本系統の本文においては『雑談集』説話の③、④と同種の無住の意図が看取できる。それは梵舜本の本文と流布本系統の本文を比較することで明らかとなる。

二 「魂魄」と「誑惑」

『雑談集』巻第九ノ一〇「誑惑事」においては次のような説話群

が見られる。^⑨

⑥ 日本ノ乞食法師ハ、誑惑ヲモテ道トシテ、渡世シ侍ル。シヲホセテハ得分也。シソコナヘバ、我ハ乞食トナノリケレバ、常ノ人ニモ不レ似過ナシ。ヲヒイダサレ侍リ。昔ヨリカ、ル習也。不レ知シテ誑惑セラル、ハ、常ノ事、知ナガラ猶誑惑セラル、事、世ニ多ク侍リ。我等聖教ヲ習テ五塵六欲、皆無実虚妄ニシテ、人ヲ誑惑スル事ト聞ナガラ、妄念モヤマズ、愛執御怨ステラレスシテ、真実ノ道ニ入ガタキ事、口惜侍ルヲヤ。

⑦ 故鎌倉ノ大将殿ノ時、誑惑法師參テ、「御許候ハゞ、上ヲモ誑惑シマイラセ候ベシ」ト云ニ、「ヲノレ誑惑ト知ナガラ、フツト誑惑セラルベカラズ」ト、仰下テ、「モシ誑惑シタラバ、禄給ベシ」ト仰下シケルニ、「承候。又誑惑シ候ニハ、敷皮一枚入候。給テ敷、誑惑シマイラセン」ト申ケレバ、タビテケリ。サテ「コレコソ、誑惑シマイラセテ候へ」ト申ケレバ、サテ猶々禄給テケリ。

① 同者ニヤ、或ル入道名ハ忘レ侍リ。魂魄ノ仁ナルヲ、或人「ヲノレガ誑惑ノ上手ナル、カノ入道ヲ誑惑シタランゾ、高名ナルベキ」ト云ニ、(以下、中略)コレモ猶々作タル事也。誑惑ノ心マコトニフカシ。菩薩ノ衆生利益ノタメノ善方便ニ

似タリ。但シコレハ墮獄ノ世智、後ハ解脫ノ善巧ナルベシ。

①常州ニ古キ入道ノ侍シ。鎌倉ニテ相知タル乞食法師、奥州ヘ誑惑セントテ、下向ノ時ハ、便宜ニテヨリテ、ソノヨシカタリ、上サマニハ、誑惑シタリシ事ナド、カタロヨシ承シ。(以下、中略)誑惑ノカサ、殊勝ナル凡夫ノ、中ニモ權智ノ巧ナル事如レ此。マシテ仏ノ方便、堅可レ信。無明煩惱業障魔、我等ヲ誑惑スル事如レ此。一切ノ煩惱業想スベテ有為ハミナ、我等ヲ誑惑スル妄境也。真実ノ智慧ヲモテ、解行タツシクコソ、大乘ノ行人ニナリテ、煩惱魔界ニ、誑惑セラルベカラズ。經ニ云ハク、「無明昧相、本非レ有、妄想因縁、和合而有云云」。根本猶無也。枝葉何実覽。此ノ事可レ信。

『雜談集』(中世の文学)の⑥の注によれば、「誑惑」は「人をたぶらかし、まどわすこと」となっている。⑥においては、その誑惑が乞食法師の生業の手段として横行していた当時の状況、そして世間の人々も仏道に反する行為から抜け出せず、誑惑されていることが語られる。④においては、実際に源頼朝が誑惑法師にやり込められた説話、①①においては、それぞれ同じような誑惑法師が相手をやり込めた説話と無住の教説が載る。「誑惑法師」に関しては『宇治拾遺物語』巻第一ノ六「中納言師時、法師の玉莖検知の事」等にも登場し、例えば田口和夫氏のご考察等が存在する。^⑩

注目すべきは傍線部である。一点目は①の傍線部にあるように、

④の誑惑法師と同種の者が登場するのであるが、無住は「或ル入道」を「魂魄ノ仁」として「誑惑ノ上手」である法師と対峙させ、「誑惑ノ上手」が「魂魄ノ仁」をやり込めるのである。二点目は①において④や①と同種の説話を載せた後の教説であるが、傍線部で示したように誑惑は仏教についての妨げとなる無明や煩惱等と同じであると説くのである。『雜談集』(中世の文学)の①の注によれば、「魂魄」は「機転のきく人。沙石集八・十六「魂魄人」となっている。さらに『雜談集』(中世の文学)の①の注を見ると「誑惑」は「人をあざむく力」と捉え直される。誑惑法師による誑惑が仏教の妨げを表す譬喩譚として存在しながらも、誑惑は一種の技能として定義されるのである。つまり、無住にとって魂魄と誑惑は表裏一体の関係であつたのではないか。

ここで、もう少し魂魄について見ていく。実は『雜談集』において、魂魄という語は他に二種の用例が認められる。それを次に挙げる。

・世間ノ人ハ魂魄ニシテ無_二正_一昧_二事ヲ思ヒ蔑_レ不_レ親。(巻第一ノ一四「三学事」)

・魂魄ハ唯第六識_レ妄慮也。(巻第一ノ一四「三学事」)

『雜談集』(中世の文学)の注によれば、右の用例には「魂魄のよ

うに実体があるのかつかみ所がない」、左の用例には「意識」とある。『日葡辞書』に「タマシイ」とあるように、ここでは他作品で用いられるような「魂」という本来の意に近い形にも見える。しかし、傍線を付したように無住は「世間ノ人ハ魂魄」であると説いている。さらに、この用例の左には「タワケ」と付されている。世間の人々は魂魄であること、それが愚かであることとしている。また、左の用例では魂魄をよこしまな考えであると無住は説くが、やはりこの用例も左に「ヲチブル、」と付されている。これらの用例からは魂魄も仏道の妨げでありながら世間の人々が陥ってしまう行為であることが見えてくる。

魂魄は市立米沢図書館蔵興譲館旧蔵米沢本『沙石集』（以下、米沢本）の独自説話、梵舜本の独自説話においても用いられている。米沢本は無住の編纂した『沙石集』の本文の初期段階である可能性が高く、重要な伝本である^⑪。また、梵舜本の魂魄については藤本徳明氏のご考察が存在する^⑫。藤本氏は梵舜本の魂魄について「ヲコ」の反対語、「サカシ」の類義語（「かしこい」と同義だが「軽蔑感を示す語」とされた上で、『沙石集』と『雑談集』の魂魄を「ほぼ同様に解しうる」とされる。

米沢本巻第八ノ二「嗚呼カマシキ人事」においては次のような説話が見られる。

⑧ 伊勢国ニ修行者有リケリ、飢渴年ニテヤトカシ食アタフル物ナシ、狂惑シテ命タスカラントヤ思ケン、童アノ中ニテ、術ヲ人ノ習ヘカシ、馬ヲ人ニナシ人ヲ馬ニナス事ヲ知りタル物ヲト云ニ、或所ノ地頭ノ若キカキハメテ物ノ愛シスルカ此ヲ聞テ、其修行者ヨヘトテヨヒテ、実ニカ、ル術知り給エルカト云フ、知リテ候ト云ヘハ、サラハ伝ヘ給ヘト云、承ハリ候ヌト云ナカラケワヒケルヲ、心ヲトランテ種々モテナシケリ、四五日カ程欲能々モテナサレ引テ物ノマテトリテ、イマ申候ハン、馬ヲ人ニナシ候術ハ馬ヲウリテ人ヨカイ候、人ヲ馬ニナシ候ハ、人ヲウリ候テ馬ヲカヒ候ト云ヘハ、コハイカニ、コレホトノ事ハ人コトニ知リタリト云ヘハ、コレヲコソ身ニハ秘蔵ノ術ト思候ヘト云ケル、修行者ハ魂魄ノモノナリ、地頭カスカサレタルヲコカマシクコソ、

⑨ 仏法ノ中ニ四依タレ義ニ不レ依言ニ云ハ、タ、言ハニヨリテ義ヲ心エヌ事ハワルキ事也、

⑩ の説話は、馬を人に変え、人を馬に変える秘術を教えることと引き換えにもてなされた修行者と、もてなした地頭の説話である。結局、修行者の秘術は人と馬を売り買ひするというものであり、地頭がだまされたという形となる。それを受け、⑨においては仏典を引き、言葉の上辺ではなく本質を理解することの重要性が説かれる。

傍線部に目を向けると、修行者は生活に困って「狂惑」することを決意して実行するのであるが、その修行者の行為に対して無住は「魂魄ノモノナリ」という評価を与えるのである。『沙石集』（新編日本古典文学全集）の注によれば、「狂惑」は「証惑」とあるべきところ。『雑談集』巻九「証惑ノ事」によれば、中世の日本では、人を騙しても、「自分は証惑だ」と名乗れば許される習いであるといわれている」とあり、「魂魄」は「思慮があり性根がしっかりしていること。本書では「嗚呼」と対比的な意味で用いられている」とある。¹³ 狂惑は証惑と同義であろうことから、㊦の説話において証惑の者が魂魄の者と無住にとって同じ価値観の中に置かれていることが看取できる。『沙石集』の初期段階である可能性を有する米沢本の独自説話において、そういった無住の価値観が認められることの意義は大きく、やはり『雑談集』においても魂魄と証惑は表裏一体の関係にあり、無住にとって一定の評価ができる概念である一方で、仏道という見地からは妄語の罪につながるような仏教の妨げとなる概念であったと言える。

また、梵舜本の独自説話を挙げると、巻第八ノ一六「魂魄ノ俗事」（題目）、「鬼九郎ニハ似ズ魂魄人ナリケリ」（本文中）、巻第八ノ一七「魂魄ノ振舞シタル事」（題目）となる。紙面の関係もあり本文は挙げないが、重要なことは魂魄の用いられ方である。梵舜本

の独自説話においては巻第八ノ一六、巻第八ノ一七と連続して魂魄の説話が見られるが、『雑談集』や米沢本のように教理的な叙述は一切認められず、ともに宮仕えをしている男の機転の良さを中心に描いている。『雑談集』や米沢本に見られるような笑話的な譬喩譚というより笑話と位置づけるべき内容となっている。そして何より梵舜本の独自説話群においては「ヲコ」と対立する概念として魂魄が存在していることである。梵舜本の独自説話からは「ヲコ」と魂魄の単純な二項対立の図式が浮かび上がる。

つまり、無住による魂魄の用例は確信犯の行為であり、「ヲコ」との対立というより証惑という概念と同じような肯定と否定を内包した仏教的価値観に通じるものであるのに対して、梵舜本における魂魄の用例は偶然性に支えられたその場における突発的な処置を行えるか否かに重点が置かれ、行えれば魂魄、行えなければ「ヲコ」となる。そして梵舜本の魂魄は絶対的な肯定評価を表す語となっている。その点でこれらの梵舜本の独自説話も無住の手によるものとするには異質である。

なお、米沢本巻第七ノ一二や梵舜本巻第九ノ一二等の四種の伝本に共通する説話において「魂魄ノ仁ナリ、神妙ニシタリ」（米沢本）とあるが、自分の妻と僧が浮気していることを寛大に許した武士に用いられており、「ヲコ」の者は登場せず、教理的な叙述も認めら

れる点で、梵舜本の独自説話とは異なる。

三 『雑談集』説話から見た『沙石集』伝本

多くの『雑談集』説話には無住の話末評語が付されているが、最後にその話末評語に注目してみたい。

『雑談集』巻第三ノ六「説法ニハ聴衆ノ有ルガ吉キ事」においては「サクラ」として説法の山場で泣き出すことを頼まれた尼僧であったが、説法が始まった途端に大声で泣き出したという説話である。その話末は「此ノ導師此ノ事ヲ聞クニ、サスガ人ナレバ身ヨリ火ヲイダス。諸人ノキ、ヲアドロカス。是即十惡ノイダス所也。能々慚愧シテ、念仏ヲ可レ唱云云」となっている。また巻第三ノ七「無明法性同躰ノ事」においては兄弟同士が夜中に出くわすが、お互いを鬼だと思い込み、塚を隔てて朝まで争ったという説話である。その話末は「如ク此ノ無明ノ鬼ナリト思ヘドモ、菩提ノアカツキニナリヌレバ、真如実相一ツ也。故ニ無明ノ夜暗ル、可キ思フ也」となっている。

無住の晩年の著作である『雑談集』の説話においても『沙石集』のような愚者が見られるが、重要なのはこういった説話が笑話ではなく、笑話的な譬喩譚として存在することである。説話のみを見れば笑話ととれる場合においても、無住は説話の前もしくは話末にお

いて仏教における位置づけを行っていくのである。まさに説教や唱導の場における説話の存在意義と同様に、あくまで譬喩譚であることを無住は忘れていない。

ここで、『沙石集』伝本に目を向けてみる。初期段階の可能性を有する米沢本と梵舜本に共通する同一説話の話末評語、そして無住の改稿後の本文とされる流布本系統と梵舜本に共通する同一説話の話末評語を挙げる。

米沢本巻第八ノ二「嗚呼カマシキ事」と梵舜本巻第八ノ八「心ト詞ノタガヒタル事」においては過去に一度も怒ったことがないという修行者に対して、それが本当かどうか、繰り返し訊ねると修行者は怒り出したという説話が載るが、その話末には異同が認められる。米沢本においては「カラ、アカメテ、クヒヲネチシカリケレハ、サテハ、サコソハトテヤミケリ、ヲコカマシク侍リ、凡夫ノナラヒ我カ非ハヲホヘヌトコソ、無言ヒシリニ、タリ」とあり、梵舜本においては「貌ヲアカメテシカリケリ」とある。米沢本の「無言ヒシリ」とは巻第四ノ一に見える笑話的な譬喩譚の登場人物を指す。傍線部からも明らかなように、同一説話であっても、米沢本においては説話に仏教的な価値観が付帯され、梵舜本においては話末に何も付さないことで説話に笑話としての位置づけが成されるのである。

流布本系統の巻第七ノ一一「慳貪者事」と梵舜本巻第八ノ一一

「児ノ飴クヒタル事」においては坊主が隠れて食べて毒だと称していた飴を小児が食べるが、水瓶を割りその順番を逆転させることで水瓶を割ったので毒を飲んで死のうとしたと小児が坊主をやり込めたという説話である。これは後には狂言「附子」へとつながり、笑いの世界に享受されていく。同一説話であるが、やはり話末評語に異同が認められる。流布本系統においては「児ノ心カシコカリケリ、学問ノ器量モ無下ニハアラシ、盗人ト智者ノ相ハ同オナシトイヘリ、舍利仏ハムカシノ盗人也、智恵ヲモテ盗モヨクスル也」(本文は慶長一〇年古活字本『沙石集』(以下、慶長一〇年本))となっており、梵舜本は「慳貪ノ坊主所レ得ナシ。児ノ知恵ユ、シクコソ。学問ノ器量モ、無下ニハアラジカシ」となっている^⑭。この説話においても、傍線部のように明確に仏教説話へと結びつける流布本系統と結びつけない梵舜本の相違が看取できる。

流布本系統の巻第八ノ七「仏鼻薫事」と梵舜本巻第八ノ一一「尼公ノ名事」も同様の関係にある。僧が弟子の法名を付けるにあたり、霊験あらたかな神仏の名前を全て組み合わせたとという説話であり、後の落語「寿限無」へとつながり、同じく笑いの世界に享受されていく。流布本系統は「誠ニナカキ名也、阿弥陀・釈迦・妙法・観音・地藏・白山・熊野・羽黒・日吉・御嶽ノ文字ヲ一ツ、ツケルナルヘシ、雑行ノ行人ノ心サマニ似タリ、イツレモ偏也、信心ノアマ

ネクトモ行モ名モ一ツモハラスヘシ」(慶長一〇年本)となっており、梵舜本は「余ニ長クコソヲボユレ」となっている。

もちろん先に見た『雑談集』説話㉔、㉕にも教説は存在せず、必ず教説が付されているわけではない。しかし、これらの梵舜本の独自説話は『雑談集』説話㉔、㉕のように㉔の仏教説話や㉕の教説を前提として配置されることもなく、全て単独で用いられているのである。説話の配置から見れば、『雑談集』説話㉔、㉕は間違いなく笑話的な譬喩譚であり、梵舜本の独自説話は笑話である。

無住が『雑談集』や『沙石集』において意図していた笑話的な譬喩譚と梵舜本は大きく齟齬しており、独自の改編が行われているのである。これらの説話が笑いの世界へと享受されていき、梵舜本の本文がそれに近い位置にあることをあわせると、梵舜本の改編は無住の手によるものではなく、ずっと後になって改編されたと見るべきではないだろうか。そして梵舜本の改編者(少なくとも巻第八の改編に関わった人物)にとつて、室町期から江戸期にかけて生み出され分野として確立されていく笑話集に対する意識が確かにあったのである。

おわりに

ここまで、『雑談集』説話を中心に『沙石集』説話と比較しながら

ら見てきたが、無住は晩年においても仏教説話集を編纂する意図を変化させることはなく、その思想は一貫している。そして両者に認められる笑いの要素は、笑話ではなく前後に載る教理をわかりやすく説くための方便としての譬喩譚であるという姿勢も変わることはなかったと言える。そういった中で、『沙石集』諸本には無住の説話集編纂の方法とは異なる内容を残した伝本（群）が存在し、そういった伝本（群）は無住自身の手によらずに後世の享受の過程において創出されたと見るべきである。例えば梵舜本のみに残る説話の中には他本の説話と一線を画していると言わざるを得ない説話が多く認められる。そこで、梵舜本の改編は一五世紀後半から一六世紀後半にかけて行われたという新たな視点が必要となってくる。

注

- ① 『雑談集』本文の引用は全て山田昭全氏、三木紀人氏校注、中世の文学『雑談集』（三弥井書店、一九七三年）を用い、鈴木堂三蔵・寛永二年版本の影印である『雑談集』（芸林社、一九七二年）を適宜参照した。なお、他の引用箇所を含め本文における記号や傍線等は全て私に付した。
- ② 美濃部重克氏「世間話と昔話——昔話「和尚と小僧」の成立——」（『中世伝承文学の諸相』、和泉書院、一九八八年）等を参照した。
- ③ 関敬吾氏「日本昔話大成」（角川書店、一九七八年—一九八〇年）における五二九B「卵は白茄子」、五二九A「鮎は剃刀」を参照した。
- ④ 工藤早弓氏「史上初公開ひと口笑話「法師物語絵巻」」（『別冊太陽

日本の心」二〇一、平凡社、二〇一二年一〇月）を参照した。

- ⑤ 明良一郎氏「無住における「智慧」について」（『国学院雑誌』八二、一九八一年八月）、相良亨氏「日本人の道理観」（相良亨氏、尾藤正英氏、秋山虔氏編『講座 日本思想』第三巻、東京大学出版会、一九八三年）、小林直樹氏『沙石集』構想の原点——真如の顕現——」（『中世説話とその基盤』、和泉書院、二〇〇四年）等を参照した。

⑥ 『沙石集』諸本に共通する説話の引用は全て米沢本の本文である渡邊綱也氏校訂『校訂廣本沙石集』（日本書房、一九四三年）を用いた。

⑦ 拙稿「後世における『沙石集』受容の在り方と意義——「思潮」としての『沙石集』——」（大取一馬氏編『日本文学とその周辺』、思文閣出版、二〇一四年）等において私見を述べた。

⑧ 梵舜本の本文の引用は全て渡邊綱也氏校注、日本古典文学大系『沙石集』（山石波書店、一九六六年）を用いた。

⑨ ①①には説話と教説の間に改行が認められないので、アルファベットの分割しなかった。

⑩ 田口和夫氏「中世的人間像——宇治拾遺物語「狂惑の法師」の解釈」（『説話』一、説話研究会、一九六八年六月）等を参照した。

⑪ 米沢本の本文の引用は注⑥に同じ。

⑫ 藤本徳明氏「『沙石集』「魂魄」説話考」（『中世仏教説話論』、笠間書院、一九七七年）を参照した。

⑬ 小島孝之氏校注・訳、新編日本古典文学全集『沙石集』（小学館、二〇〇一年）を参照した。

⑭ 流布本系統の本文については、慶長一〇年本の本文である深井一郎氏編『慶長十年古活字本沙石集総索引——影印篇——』（勉誠社、一九八〇年）を用いた。